

平成31年 (2019年) 3月25日 (月曜日)

生涯教育の先駆者

廣池千九郎の業績

— 著作に込めた思い —

⑧『道德科学の論文』



廣池千九郎

いったマイナスのイメージを持たれる方も多いのではないのでしょうか。しかし昨今のニュースで企業の不祥事や学校でのいじめ、家庭内の不幸な事件等を見聞きすると、やはりモラルは必要だと感じます。

廣池千九郎はこれまでの人生経験や学問的研究から、個人や社会に起こる様々な問題には道德の質の高低が関係していると考えました。

そこで、人々に質の高い道德の実行を促すため、道德実行の効果を科学的に証明する必要性があるとして、大正初期から徐々に構想を固めていきます。従来の研究を集成し、さらに自らが日々道德を実践して、その結果を研究にフィードバックし、全身全霊をかけて執筆に打ち込みました。

大正15年に謄写版印刷が完成し、昭和3年12

月、『道德科学の論文』として刊行しました。ただし初版本は305部の限定出版で、皇室や政府高官、学界関係者などに献本しています。一般向けには、昭和9年に追加文を付した第2版を出版しました。

「二大頭脳の産物」

廣池はこの研究成果を従来の道德科学(モラルサイエンス)と混同されるのを避けるため、英語で「道德」を意味する「モラル」(moral)と、「学」を意味する「ロジー」(log)を合成して学術語を造り、「モラロジー」(moralog)と称しました。

また、礼儀作法、慣習、同情、親切など、これまで社会一般で道德と考えられてきたものを「普通道

徳」と呼び、世界の諸聖人や日本の歴代天皇が実行した道德を「最高道德」と名付けました。そして人間の安心や幸福、社会の改善、世界の平和は、「最高道德」の実行による人間性の向上によって実現すると説いています。

本書には、国際連盟事務次長を務めた新渡戸稲造、大蔵大臣や東京市長を務めた阪谷芳郎、東洋史学者の白鳥庫吉が序文を寄せています。

それぞれ「二大頭脳(マスターマインド)の産物」(新渡戸)、「日本人としての誇りというだけでなく、現代人類の誇りである」(阪谷)、「人類の実生活に関する重要な幾多の根本原理を発見し、これを秩序立てて一つの学問体系にした」(白鳥)と評価しています。

廣池は本書の執筆を機に、モラロジーに基づく社会教育を展開していくことになりました。

(公益財団法人モラロジー研究所廣池千九郎記念館学芸員・矢野篤)



『道德科学の論文』初版 (昭和3年12月発行)

道德やモラルというと堅苦しい、形式的、偽善と

道德実行の効果を証明

法学博士の学位を取得。しかし大病をきっかけに、道德の科学的研究という新たな課題に取り組みます。

大正15年に謄写版印刷が完成し、昭和3年12